

図7 症例3 (83歳の女性)
慢性閉塞性肺疾患で在宅酸素療法中。全身麻酔がきわめて困難と診断されたため、最大短径67 mmの腹部大動脈瘤 (A) に対して、局所麻酔下にEVAR治療を行った (B)。

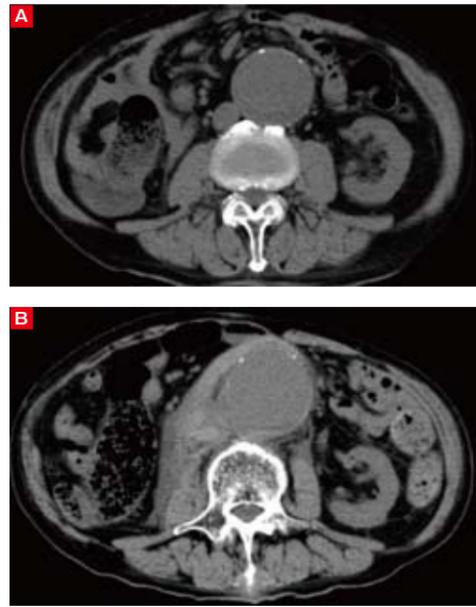


図8 症例4 (86歳の男性)
最大短径52 mmの腹部大動脈瘤を認めたが (昨年6月)、高度大動脈弁狭窄、虚血性心疾患 (PCI後)、慢性腎不全 (eGFR 15.8)、高齢のため、保存的に経過をみていた。1年後、突然の腰背部痛が出現し、瘤の最大短径55 mmへの拡大と右後壁への破裂を認めた (今年7月)。

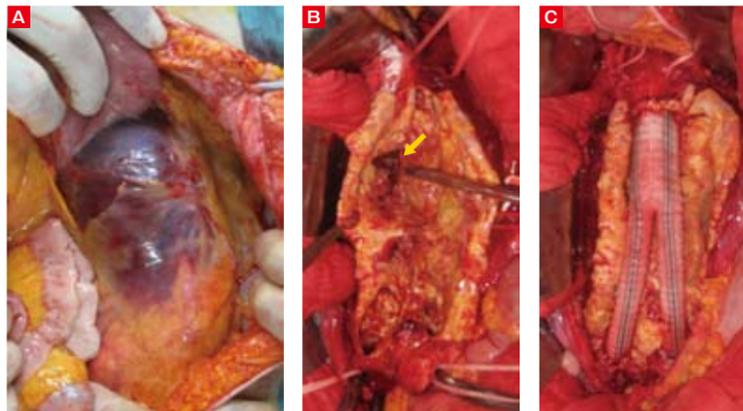


図9 症例4
緊急手術を施行し、破裂に伴う後腹膜の血腫と (A)、右側後壁の破裂孔 (B, →) を認めた。二又人工血管置換術 (C) を行い救命した。

〔経過〕 緊急手術で二又人工血管置換術を行い、救命した (図9)。

症例5 82歳の男性

〔現病歴〕 突然発症した労作時呼吸困難に対して、他院で心不全治療を行うが、増悪緩解を繰り返していた。発症後6ヵ月でCT検査を行い、血管外科紹介された。

〔検査所見〕 胸部X線：心陰影の拡大と右胸水貯留

を認め、心不全の所見であった。心電図：肺性Pと左室肥大を示した。心エコー：収縮能は保たれており、駆出率 (EF) は65%であった。血管造影：左総腸骨動脈から内腸骨動脈にかけての動脈瘤を認め、左腸骨動脈瘤の静脈への破裂により生じた動静脈瘻と診断した。この症例は、腎静脈下の大静脈が左右二本存在するタイプであったため、シャントした造影剤は大動脈の左側を上行している。また、左下肢の静脈系への造影剤の逆流も認める (図10)。この患者は発作以来左下肢静脈瘤も認めた。一般に、瘻孔部の血管雑音を聴取するとこの疾患を疑うが、心不全が主訴であるため診断が遅れることが多い。な



図10 症例5 (82歳の男性)
突然発症した労作時呼吸困難に対して他院で心不全治療を行うが、増悪緩解を繰り返していた。血管造影検査で、左総腸骨動脈から内腸骨動脈にかけての動脈瘤を認め、左腸骨動脈瘤の静脈への破裂により生じた動静脈瘻と診断した。この症例は腎静脈下の大静脈が左右二本存在するタイプであったため、シャントした造影剤は大動脈の左側を上行している (A)。また、左下肢の静脈系への造影剤の逆流も認める (B)。

お、大動脈瘤破裂による動静脈瘻形成例での臨床症状・所見は、腹痛または背部痛 (73 ~ 100%)、連続性血管雑音 (61 ~ 83%)、腹部拍動性腫瘍 (40 ~ 58%)、うっ血性心不全 (37 ~ 58%)、下肢腫脹・静脈瘤 (22 ~ 34%)、血尿・血便 (22 ~ 30%) である。〔経過〕 内外腸骨静脈の合流部に動脈瘤が破裂していたため、治療は瘤切除、人工血管置換、瘻孔閉鎖を行った。瘻孔閉鎖により血行動態の変化が大きく、心筋梗塞の発症頻度が高いとの報告もあり、SGカテーテルを用いた管理を行うことが推奨されている。

経過・予後

腹部大動脈瘤の術後の遠隔生存率は5年で約70%と、年齢・性で補正した腹部大動脈瘤のない一般人口の生存率約80%よりも低下している。また、10年生存率は約40%である。腹部大動脈瘤の患者は、術前より心疾患・慢性閉塞性肺疾患・高血圧・高脂血症・脳血管障害・癌などの合併が多く、これらが術後の生命予後も規定している。術後の遠隔死因の2/3は心・脳・血管疾患である。生存率に影響を与える因子は、年齢・心疾患 (心不全、狭心症、心電図上の虚血、陈旧性梗塞、左室肥大、不整脈)・高血圧・慢性閉塞性肺疾患・腎機能・継続する喫煙であり、術後これらの管理が必要となる。

大動脈解離

概念・発生メカニズム

大動脈解離は、大動脈壁が中膜のレベルで二層に剥離し、動脈走行に沿ってある長さ血管腔が2つになり、動脈壁内に血流あるいは血腫が存在する病態を指す。本来の動脈内腔を真腔、新たに生じた内腔を偽腔、両者を隔てる隔壁をフラップという。真腔と偽腔は通常、1~数個の裂孔 (亀裂: tear) によりつながっているが、裂孔が不明の場合もある。前者が偽腔開存型大動脈解離、後者が偽腔閉塞型大動脈解離である。真腔から偽腔へ血液が流入する裂孔を入口部 (entry)、真腔に再流入する裂孔を再入口部 (re-entry) と称する。本疾患は瘤形成を認めないことも多く、通常は「大動脈解離」と称し、径が拡大して瘤を認めた場合「解離性大動脈瘤」と呼ぶ。大動脈解離はその状態により治療法と予後が異なるため分類がなされている (表2)。

大動脈解離の発生メカニズムには不明な点が多いが、弾性板間の弾性線維の減少やMarfan症候群、Ehlers-Danlos症候群などに見られる嚢胞状中膜壊死が、中膜の脆弱性を引き起こし、大動脈解離の原因となることが